

包括的な若者支援を目指して

平成22年の子ども・若者育成支援推進法の施行にともない、

切れ目のない支援、他機関との連携がキーワードとなっています。

京都市ユースサービス協会では京都市内7つの青少年活動センターと

子ども・若者総合相談窓口、子ども・若者支援室（CATCH）や京都若者サポートステーションを受託し、

包括的な若者支援を目指して日々取り組んでいます。

取組み拡がるサポステ 事例発表会に参加して

京都若者サポートステーション ユースワーカー 富田祐子 矢盛晶

内閣府の調査によると平成22年の日本の若年無業者（15～39歳で家事も通学もしていない無業者）は約81万人（うち京都市は1万7500人）と高い数値です。

平成18年度に若者雇用戦略促進として厚生労働省から委託を受けた団体が「地域若者サポートステーション」（以下サポステ）を全国25か所でスタートし、平成25年度には前年度から新たに44か所増加し全国160か所に拡充されます。また、高校中退者等に早期支援を行い、切れ目のない支援を図るため、平成22年度より一部のサポステで「高校中退者等アウトリーチ事業」が開始されました。25年度からは「サポステ・学校連携推進事業」として、これまでの中退者予防支援のほか、学び直し支援等をすべてのサポステで実施します。

新たな取組みが期待されているなか、さる2月22日に東京でサポステ事業の全国的な事例発表会が行われました。鍵となるテーマで先駆的な取組をしている8か所のサポステが4分科会に分かれて事例を発表しました。それぞれの地域の利点を生かしながら、課題解消になるように取り組まれており、今後の参考となりました。



ほうふサポステ事例発表

第1分科会

就労支援機関との連携

- 地域若者サポートステーションはまつ
- ほつひ若者サポートステーション

サポステはまつは、ハローワークの窓口担当者との顔の見える信頼関係を築きながら、お互いの長所を活かした取組みを発表されました。一方、ほつひサポステは、キャリア・コンサルタントを含む全職員が自分達でサポステをつくる意識を持つことやハローワーク内での相談やジョブトレーニング等のさまざまな取組み効果を紹介されました。

第2分科会

地域ネットワークの形成・活用

- さつぼろ若者サポートステーション
- あやべ若者サポートステーション

さつぼろサポステは平成24年度から市民ボランティアを活用した取組み「コネクションズネットワーク〜こねつと〜」について。また、京都府北部の拠点として根を広げるあやべサポステは地域の特色を生かし連携した取組みがそれぞれ発表されました。

第3分科会

学校・教育機関との連携

- 若者サポートステーションやま
- おおいた若者サポートステーション

サポステやまとは、奈良県内で高校中退者支援のシステムづくりにいち早く取組、おおいたサポステは、専門学校や大学と連携し企業定着まで切れ目のない支援ぶりを披露されました。

第4分科会

広報・利用者の掘り起し

- 長崎若者サポートステーション
- かわくち若者サポートステーション

長崎サポステは支援を必要としている方々への広報について、ティッシュ配りや就労意識調査の他、離島対策などさまざまな取組みが発表されました。かわくちサポステは、どんな相談や事業を行い、どこまで支援できるか具体事例を出して問いかけました。



さつぼろサポステ、あやべサポステ パネルディスカッション

東京都内のサポステ2か所を視察

前日の2月21日は都内のみたか若者サポートステーションとたちかわ若者サポートステーションを視察しました。

JR三鷹駅から10分ほど歩いたところにみたかサポステがありました。駅からつながっている商店街の中にあり、ハローワークが隣接しています。ここでは企業から業務請負をして利用者に就労の場を与えています。その他、サポステや商店街の広報活動など主な取組みを伺いました。「何事も楽しみながら役立つことをしていきたい」と話す若者支援事業統括責任者の高橋薫さん。周りの資源を最大限に生かしながらプログラム運営をされていることが印象的でした。

一方、たちかわサポステはJR立川駅から大通りに沿って5分ほど歩いたところ。1階のJA農産物直販所を奥の階段を上るとたちかわサポステ。副所長の新宅圭峰さんからPC講座やJA直販所での就労体験など主な取組や支援の枠組み。またキャリア・コンサルタントの日下麻里絵さんからハローワークとの連携について伺いました。若者がより早く就労に結び付けられるように、また丁寧な支援ができるように細かな仕組みがありました。



みたか若者サポートステーション 高橋薫さん



たちかわ若者サポートステーション 副所長 新宅圭峰さん(左) キャリア・コンサルタント 日下麻里絵さん

- どのサポステも地域の特性を生かし、具体的に提案をしながら関係機関と連携していることが印象的でした。また、発表会を通じて取組みを外部に知ってもらうことが新たな連携につながっていくと実感しました。(富田)

- 事例発表会に参加をして、ハローワークや教育機関と、より密に連携を行うことが重要だと感じました。視察では地域の中で若者が育つ環境について、サポステの役割とは何かを考えさせられました。(矢盛)

子ども・若者支援室より

子ども・若者相談業務に携わる

民間団体職員研修

今年1月28日から2月1日まで、東京で行われた内閣府主催の宿泊研修に参加しました。社会生活を営む上での困難を有する子ども・若者の特性やその家族についての理解、支援方策についての学びを深めること、継続した支援を行うための組織運営についても実践的に学ぶことを目的として開催されました。

初日の全体講義では、NPO法人「育て上げ」ネット(東京都立川市)の井村氏から「民間団体と地域、関係機関との連携」をテーマにした講義がありました。井村氏は困難な状況にある子ども・若者支援には他機関との「連携」が必須だとしています。子ども・若者育成支援推進法に基づく京都市の取組みとして子ども・若者支援室が当協会に開設された意義を、改めて実感する機会となりました。

2日目は分科会が行われ、3日目は神奈川県立大学保健福祉学部の生田氏より「引きこもり/不登校児の親面接―理論と実践―」をテーマに、生田氏の専門分野であるブリーフセラピーを用いた親面接の技法を学びました。子ども・若者支援室では、困難を抱えた子ども・若者以外に、その親からの相談が少なくありません。生田氏は、ブリーフセラピーを子ども・若者が来談しない面談場面の際に有効であるとしています。ブリーフセラピーでは、親を子ども・若者について日常的に関わるなかで本人の情報を持っている専門家として捉え、支援者は「専門家である親へ積極的に質問出来る」といいます。また、積極的に親をコンプリメントし褒めることの重要性を示します。本人に関わる親のやる気を高め、親がプラスに変化することで、子ども・若者へもプラスの変化をもたらすというのです。

4日目は浜松医科大学の杉山登志郎氏より「発達障害から発達障害」の講演があり、児童精神科医という杉山氏の立場から精神病と発達障害、虐待について丁寧な講義がありました。子ども・若者支援室の来談者のなかには精神疾患や発達障害を持つ、あるいは疑われるケースも多いのが実態です。特に、精神疾患症状と発達障害からくる症状、また虐待からくる症状のなかには、非常に似ているものも多く、医療の専門家でも迷う場面があるという話は興味深いものでした。同じように、支援者として本人に向き合い、見立てを行う際にも似たような場面があるからです。講義のなかで、本人の何に留意したらよいか、各症状の鑑別点を具体的に示されたことは、それらの症状を見分ける手掛かりとなりました。

5日間の研修では、全国から1000人の参加があり、同じ民間団体職員として働く方々と顔の見える関係で交流できたことも大きな収穫でした。この出会いに感謝しつつ、つながった関係(輪)のなかで互いが活かし生かされる支援を目指していきます。

子ども・若者支援室 支援コーディネーター

繁澤あゆみ